

## ある断熱材と話した日

岐阜県立岐阜商業高校 P N 焼き芋

今、布団に溶け込むかこんにやくになりたい。これが今の私の気持ち。

宿題なんて、勉強なんて、いろいろと何にもしたくない。さすが夏休み。だらーつと過ごしている。

布団さんっていつも気持ちいいし寝転がっているだけで仕事といったら人間を支えるくらいなのかな。こんにやくさんはだいたい水に浸かっているけど調理されたら嫌なのかな？嬉しいのかな？仕事は食べられるくらいであんまなさそう。こんな事を布団に寝ころびながら考えていた。こんにやくより一度布団に溶け込んでみたいと思った。その瞬間、布団に吸い込まれた。一瞬すぎて何が起こったのかよく分からない。すると誰かに呼ばれている気がした。まさかと思ったが布団の中のウレタンフォームに話しかけられていた。

「あなたは誰？もしかして人間？」

私は驚きを隠せないまま答えた。

「そうですけど・・・」

「あのね、こんなウレタン世界から離れて人間の世界に行きたいの。一日、入れ替わって欲しくないかな？」

と聞かれた。ちやうど自分もそうしたいし、すぐさまオツケーを出した。そうして私のウレタン世界一日体験生活は始まった。まず、人間によって外に干してもらった。爽やかで気持ちいいのかと思いきやプールサイドのアスファルトぐらい暑かった。焼けそう。まるで日焼けサロンに行っているみたい。そしてやっと家の中に入れたと思ったら子供に低反発だからと遊ばれている。せっかく寝ころべて休憩なのに疲れた。夕方ごろやっつと休憩。気持ちよく寝ていたのにそんな時間もつかの間。夜、人間が寝に来た。

「重い。これを約7時間！無理無理。やっぱり早く人間に戻してくれ。」

咄嗟に言葉が出た。

一方、ウレタン世界から人間世界に来たウレタンフォームくんは勉強もうとうとしながらだがすこしはやっていた。普通にカップラーメンも食べていて、どれもこれも初めてのことに顔を梅干しぐらいに赤くして興奮状態。なんてこった。人間の世界の方が楽しそうで仕事がないじゃないか。私は心の中で強くそう思った。

なんとか耐えて朝を迎えた。ウレタンフォームくんは入れ替わり期間を延長して欲しいと言う。そんなん受け入れられない。私は

「ごめん。ほんともう無理。耐えられない。こんなにきついとは。あなたの気持ちが少しは分かりました。今後、感謝して布団で寝させていたきたいのでお願いします。替わってください。」

と頼んだ。すると、

「まあ大変さを分かってくれたならいいですよ。あなたがしっかり寝られるよう支えますね。人間の世界も楽しく体験できましたし。」

と答えてくれた。

私は、ぱっと目を覚ました。思わず寝ていたのだ。そしてこの話は夢だったのだ。

しかし、このウレタンフォームくんとのお話は決して忘れない。毎日感謝して布団で寝ようと感じた。その日の夜

「いつもありがとう。」

と言ってから寝た。

「うん。頑張るね。ゆっくり休んでね。おやすみ。」

とどこからか聞き覚えのある声が聞こえてきたのであった。